

雜阿含の現在形成立年代について

花 山 勝 道

雜阿含經の現在形成立の年代は、一般には紀元後三世紀から五世紀の間に推定されている。

結論を先に言えば、私はこの年代は更に引き下げられるのではないかと思う。本稿では雜阿含經の現在形成立年代を五世紀から六世紀の間に推定した。即ち現在の劉宋譯雜阿含經五〇卷は、求那跋陀羅 Gunabhadra が漢譯した當時或はその後に於て現在の如き五〇卷の雜阿含經が出来上つたと考える。直言すれば雜阿含經以外の資料が現在の雜阿含經に混入している。

學者によれば、現存する雜阿含經の成立は三世紀から五世紀の間であるという。即ち、(1)阿育王 Asoka の傳記、(2)弗沙密多王 Purnyamitra の佛教迫害の記事、(3)釋迦 Saka・耶槃那 Yavana・鉢羅婆 Pahlava・兜沙羅 Tukhara・Tushara の四王が佛塔を破壊し比丘を殺害したという諸傳説が雜阿含經の中に説かれている。これらは紀元前三世紀から紀元後一世紀頃に至るまでの事件であり、それが教團に於て語り傳へとして傳承されるまではある一定の時期を要したことであろうから、これらの傳承が雜阿含經の中に編入され現在の様な雜阿含經の形式に整理されたのは、恐らく「紀元後二百年から四百年の間であつて、是が大體に於て上下の限界」であろうという。勿論これらの一連の傳承は後世のある時代に雜阿含經の中

に竄入せられた部分であることは疑いない。たゞ「現在の雜阿含經が翻譯當時の原文を増減なく傳へたものと假定した上で」雜阿含經の現在形成立の年代が推定された。本稿は「現在の雜阿含經は翻譯當時の原文を増減なく傳へてはいない」と推定する立場に立つ。

先に擧げた阿育王尊に關する一連の傳承は、劉宋譯の雜阿含經二三及び卷二五の二卷に含まれる三經の中に見出すことが出来る。本稿では便宜上これらの二卷三經の内容を「雜阿含經の阿育譬喻 *Ar. kavāḍana*」と呼んでおく。

阿育王の傳説を傳える文獻は、阿育王經一〇卷、阿育王傳七卷、ディヴァ・アヴァダーナ Divyāvadāna, Chap. 26-29、及び本稿で問題とする雜阿含經の阿育譬喻等を擧げることが出来る。これら四種の阿育譬喻は、共に説一切有部の傳承になつたものであるらしいが、四種の間に於て二種の系統に分けられる。傳説によれば、阿育王は父王である頻頭婆羅王 Bindusara から王位をうばい、長兄修私（＝師）摩 Sūśima を滅ぼして孔雀王朝 Maurya 第三代の王位についたという。この王系譜を傳えている阿育王經と雜阿含經とは、初代を施那羅笈多（月護）王 Candragupta とする。これに對して阿育王傳とディヴァ・アヴァダーナとは、初代の王を頻婆娑羅王 Bimbisara とし、宿尸魔 Sūśima を第十二番目に擧げる。こゝ

で四種の阿育譬喩に關して王系譜は、(1)阿育王經―雜阿含經。(2)阿育王傳―ディヴァ・アヴァダーナの二系列が示される。

これに對し、内容又は經典構成の組織の上からは、(1)阿育王經―ディヴァ・アヴァダーナ。(2)阿育王傳―雜阿含經という別な二系列が示される。本稿では阿育王傳―雜阿含經の系列が問題となる。

阿育王傳は普通七卷に數えられている。しかし宋・元・明の三藏版は之を五卷に卷別し、又古經錄も之を五卷に記錄する。恐らく翻譯當時の阿育王傳は五卷別の組織であつたのであらう。この五卷別の阿育王傳が雜阿含經の阿育譬喩と密接な關係を有する。即ち、雜阿含經卷二三(第六〇四經)は阿育王傳卷一に全く等しい。又雜阿含經卷二五のA(第六四〇經)は阿育王傳卷五の最終部に一致し、B(第六四一經)は雜阿含經一三六二經中唯一つ經題を冠する經であつて、阿育王傳卷二の第四品「半菴摩羅果因緣」に一致する。要言すれば、雜阿含經の阿育譬喩は經典構成の組織の點から言つて、阿育王傳の始めと終り及び阿育王晩年の悲話を傳えた、かの有名な半菴摩羅果の因緣によつて形成せられている。尤も兩者は翻譯者も異り又原典も異つたのであらうから細部に亘る記錄まで全て一致しているとは言えない。先に擧げた王系譜の相異等は特に著しい差異點である。しかし經典組織の如上の類型は、雜阿含經の阿育譬喩が阿育王傳系統の集大成を知つていたと推定することが出来る。即ち雜阿含經の阿育譬喩は現在の如き二卷三經のみの短い阿育譬喩ではなく、恐らくは阿育王傳と同程度の部量のものであり、又同類型の組織を有していたものであらう。その中の前後と中の一部が抄出されて現在の如き二卷三經にまとめられ、雜阿含經の中に編入されたものと考えられる。

雜阿含經の現在形成年代について(花 山)

次に、雜阿含經の阿育譬喩が雜阿含經自身の中で如何なる位置を占めているか、その特質について一顧してみることとする。雜阿含經は「如是我聞一時佛在」云々の通序に始まる極めて短い小經一三六二經の集大成である。各經は各、獨立した短經であり、これらの短經が項目的に或は形式的に相應類聚せられたものであるという。この様に、雜阿含經に含まれる諸經が極めて短い小經であること、又それらが項目的に類聚せられていることが雜阿含經が他の阿含に比して有する唯一の特徴とされる。而るに、卷二三・卷二五の三經は、(1)他の諸經に比較して類例のない長經である。(2)卷二五の二經には「如是我聞」云々の通序が略されている。(3)卷二五のB(第六四一經)には他に例を見ることの出来ないところの經題、即ち「阿育王施半阿摩勒果因緣經」が冠せられている、という三つの特徴を示している。このことはこれら三經の内容が一連する傳承であつて、それ自身が雜阿含經の内容ではないことを露呈している。又雜阿含經の外的資料即ち雜阿含經について記錄しているところの諸々の文獻、パーリの相應部 *Saṃyutta Nikāya*、及び別系部派の所傳になつたといはれる「別譯雜阿含經」の中にも、この部分の相當經が見出せないばかりでなく、雜阿含經の中に阿育譬喩が含まれねばならない理由の一つも示されていない。

以上雜阿含經の現在形成年代の資料ともなるべき雜阿含經の阿育譬喩について、(1)阿育譬喩としての性格。(2)雜阿含經自身の中で示す特性について概観してみた。又この中に説かれている内容から言つてもこの部分が後世に於て雜阿含經の中に編入されたことは疑いが無い。ではこの阿育譬喩が何時雜阿含經の中に編入せしめられたか。即ちこの編入の時を以て雜阿含經の現在形成年代とする

ことが出来る。先に述べた様に學者はこれが印度に於て部派の手によつて編入されたものと推定した。もしそれが事實であるならば學者の説は正しい。現在、梵文雜阿含の斷片十三種が紹介され、又チベットでは十二種の部分譯が行はれているが、しかしこれらは何れも部分的斷片である爲目下の課題には資料として取り上げることが出来ない。

經錄によれば求那跋陀羅には雜阿含經の外に「無憂王經一卷」(缺)の譯出があつたことになつてゐる。無憂王經一卷とは何か。經題によつて内容を慮れば多分阿育譬喻の一系類であらう。即ち求那跋陀羅によつては雜阿含經に含まれる二卷の阿育譬喻と、無憂王經という一卷の阿育譬喻との二種の阿育譬喻が譯出されたと想定することが出来る。そこで同一譯者による二種の阿育譬喻について次の三點を考へることが出来る。

(1) 兩者の阿育譬喻は全く異つた内容であつた。

(2) 甲或は乙は何れかの續篇であつた。

(3) 兩者は全く同じ内容のものであつた。

(1)の場合、翻譯者は二種類の全く異つた阿育譬喻の原典を有したことになる。これは當時の中國の現状で可能であつたか。又同一譯者が二種の阿育譬喻を譯出せねばならなかつた必然性が考慮されねばならない。即ち少くとも現存する四種の阿育譬喻の中心素材は共通するのである。(2)の場合、翻譯者はたゞ一種の原典を有する。即ち乙は甲に含まれない部分のみを別出したことになる。この場合乙が「無憂王經」と名付けられる内容を見當てることが出来ない。(3)の場合、量的に言えば兩者の無關係を斷じ去ることは出来ない。又乙が甲の抄出別行經でないことは記録に示す如くである。更に現在の

雜阿含經は若干組織が混亂してゐる。その混亂の様相は「卷を單位とした卷配列の順序に起因してゐる」⁽¹⁰⁾。これは雜阿含經が翻譯の當初か或はそれに近い時代に於て後人によつて誤まつて混亂したことを意味する。この事實は、同一譯者による無憂王經一卷が混亂の當時に於て現在の卷二三、卷二五の位置に混入して來たと考へる理由にすることが出来る。

以上を要約すれば、(1)雜阿含經の組織は亂れてゐる。その混亂の様相は卷單位である。(2)この場合若干の卷は他から混入したとする可能性が存する。(3)卷二三・卷二五の二卷三經は雜阿含經の内容として相應しくない。(4)これらは阿育王傳の系列に屬する一連の阿育譬喻である。(5)雜阿含經の同譯者に「無憂王經一卷」の譯出があつた。(6)この「無憂王經一卷」が雜阿含經の中に混入したと考へることが出来る。即ち、先に擧げた雜阿含中に含まれる阿育王・弗沙密多王及び釋迦等の四王の記事を含む卷二三・卷二五の二卷は元來雜阿含經の内容ではなく、「無憂王經」の内容ではなかつたかと推定される。尤も出三藏記集は「雜阿含經五十卷」を記録し、又同じ作者僧祐は「釋迦譜」の中で、「出雜阿含」として阿育王等の阿育譬喻を引用してゐるから、僧祐の時代には現在の雜阿含經の組織は既に形成されてゐたことになる。以上によつて雜阿含經の現在形成立の年代は翻譯時(四三五)から僧祐の時代(五九一)、即ち西紀五世紀から六世紀の間に比定することが出来る。

1 松本文三郎著「佛典の研究」(三一二頁～三三二頁)。

2 大正、二、一六一・b～一七〇・c。一八〇・a～一八二・

a。一七七 b～一八〇・a。

3 大正、五〇、一三一・僧伽婆羅(512)譯。大正、五〇、九

雜阿含經原型復元試案表

雜阿含經の現在形成立年代について（花 山）

(原型) (現行)
卷次 卷次

(五蘊誦)

1 10 cf. 大2. 67 a.

2 3

3 2

4 5

5 6

6 7

7 7

(六入誦)

8 8

9 9

10 11

11 13

12 43

(雜因誦)

13 12

14 14

15 15

16 16 cf. 大 2. 108. c

17 17 cf. 大 2. 116. c

(弟子所說誦)

18 18 cf. 大 2. 126. c

19 19

20 20

21 21

(道 誦)

22 24 cf. 大 2. 170. c.

23 26

24 27

25 28

26 29

27 30

28 31

29 41

30 32

31 33

32 34

33 35

34 47

35 37

(傷 誦)

36 38

37 39

38 40

39 46

40 42

41 4

42 44

43 45

44 36

45 22

46 48

47 49

48 50

23 25 cf. 無憂王經 (缺)

cf. 大2. 67 a.

cf. 大 2. 108. c

cf. 大 2. 116. c

cf. 大 2. 126. c

cf. 大 2. 170. c.

cf. 別譯雜阿含經〔二誦〕に一致。

cf.. 別譯雜阿含經〔初誦〕に一致。

cf. 無憂王經 (缺)

- 九、安法欽 (306) 譯。Div. ed. by E. B. Cowell and Neil, Cambridge Uni. 1886. (pp. 348-434). cf. Winternitz; Przyski; R. Mitra.
- 4 大正、五〇・一三二・b。大正、二・一六二・a。大正、五〇・九九・c。Div. p. 369, l. 9~.
- 5 大正、四九、六五・a。大正、五五、二三六・a。同、三五四・b。
- 6 四分律 (大正、二二、九六八・b)。五分律 (大正、二二、一九一・a)。毘尼母經 (大正、二四、八二〇・a)。摩訶僧祇律 (大正、二二、四九一・c)。瑜伽論 (大正、三〇、七七二・c)。根本說一切有部毘奈耶雜事 (大正、二四、四〇七・c) 等。
- 7 哲學雜誌・四八二 (四八三 (昭二・四・五))。
- 8 宗教研究・新二の四 (大正一四・六)。
- 9 大正、五五、一三・a。一一五・c。一七五・b。二一三・a。二五九・a。三六二・b。五二八・c。八二五・b。
- 10 學會誌第二卷二號拙稿參照。
- 11 大正、五〇、七六・b (八四・b)。
- 追記 以下に掲げた「雜阿含經原型復元試案」は、姉崎・椎尾兩博士の試みとは、別譯雜阿含經と一致する部分に於て若干異なる。本試案では「雜阿含經の組織混亂は卷配列の順に起因する」との推定に基礎を置くからである。卷四一・四六・四・三六・二二は別譯原型的組織に従い、卷一〇・二は攝頌により、卷一三・四三・一二・四七は各内容から判斷して各位置に復した。特に椎尾博士の新訂本 (國譯・阿含部) に負うところが大きい。